

実践紹介

宗教倫理教育担当者ワークショップの27年の記録

土屋 至

毎年夏に3泊4日で行われる、カトリック学校で「宗教」や「倫理」を担当している教員たちの研修会「宗教倫理教育担当者ワークショップ」が2016年で第27回目を迎えた。このワークショップは、私の参加したどの教員研修会よりもパワフルで実践的ですが、すぐにも役に立つものであったことを確信している。

いま、このワークショップの歴史とワークショップの進め方の中に、そのパワーの源泉をたずねてみることにした。

A 27-Year Record of Workshops for Teacher Training in Religion and Ethics

TSUCHIYA Itaru

I have held workshops for teacher training in religion and ethics every summer for 27 years. About 20 teachers have taken part eagerly in each of these workshops and the workshops were very effective for the teachers. The climax of the workshops has been the trial lessons given on the 3rd day. Various experiences, especially in regard to the lessons, have been shared among them and they have brought us a very abundant harvest.

1. 宗教倫理教育担当者ワークショップの開催まで

筆者が清泉女学院中学高等学校の倫理科教諭として赴任して3年目のこと、あるカトリック学校の「宗教」の新任教員になったT先生が筆者の「宗教」の授業の参観にやってきた。話をきくと「宗教」の授業をどうやったらいいか分からないというのだ。

時代は1980年代の後半、学校からシスターや司祭の姿が潮がひくごとくいなくなっていくちょっと前のことである。筆者の勤めた学校はそういう時代がすぐに来ることを予感して、いち早く信徒の教員を「宗教」の担当者にしてきた。

T先生の学校はもっと早くシスターがいなくなった学校であった。そのとき、T先生と「私たちがのように宗教の授業をどうしたらいいか、悩みながら試行錯誤を行っている教員が全国にたくさんいるにちがいない」と全国のカトリック学校に「宗教倫理教育担当者ワークショップ」を呼びかけることにした。

どこから講師を呼んで話を聞く、あるいは研究授業をして発表するという従来の教員研修の形ではなく、作業をしながら相互に学びあうワークショップとすること、模擬授業を中心とすること、それぞれが授業で使っている教材プリントや視聴覚教材、授業の成果物、授業プランなどを持ち寄って授業実践の共有化を図ること、それから自分の教員生活を振り返り授業を実践する上でのやりがいや悩みなどを分かち合うこと、毎回司祭助言者をお願いすることなどの要素を入れてプログラムを決めた。これらは第 27 回目を迎えた今回でも基本的にはほとんどそのまま踏襲されている。

つまり、それぞれの授業実践の交流、分かち合いの場としてこのワークショップ（以下「WS」と表記）をスタートさせた。募集要項には「ただ見るだけうけとるだけの受け身的参加は認めません」ということが記載され、それぞれの授業で使うプリントや視聴覚教材、授業ノート、授業に役立つ書籍、生徒と一緒に歌うための楽譜や、授業計画表、シラバス、など持ち寄ることを求めた。これがこの WS の知的源泉であると思うからである。

とくに模擬授業については「模擬授業をする覚悟を決めて参加すること。場合によっては模擬授業担当者をジャンケンやあみだくじで決めることもあります」と記載したこともあった。ここまで厳しく言う理由が実はあった。まだこのころこの種の研修会を開くとシスターが参加者の半分以上を占めてしまう時であった。そしてシスター方の多くはみな異口同音に「私は学びに来たので、模擬授業などととてもとても」と「謙虚に」辞退されるが、これではこの WS は成り立たない。この模擬授業条項はシスターの参加がほとんどいなくなった第 20 回を機に「始めて参加するかたは模擬授業をしなくてもいい、もちろんすることを歓迎するけれど」という条項に変更された。

2. これまでの履歴

第 1 回の「宗教倫理教育担当者ワークショップ」は 1989 年横浜カトリックセンターで行った。このワークショップは T 先生と私の二人の個人的な呼びかけで始まった。何の権威もお墨付きもないこの呼びかけでは私的な研究会みたいな感じだから、学校が参加費交通費を出してくれる公費出張扱いにはならないだろうなとおもったけれど、それでも 16 名が参加した。助言者はそのとき上智大学部神学部の教授だった百瀬文晃神父にお願いした。16 名のうちシスターは 4 人、うち一人は私が勤めていた学校の校長で、校長であることを隠しての参加だった。また参加者のうち 4 名が現在校長職にあるということも特筆すべきであろう。模擬授業を 6 時間分行い、その内容のほとんどをよく覚えている。会場には浴室の設備がなく、フロは近くの銭湯にいった。この横浜カトリックセンターはもう存在していない。

さて、これまでの研修会のテーマ、参加者数などをリストアップしてみよう。

会場については、第 2 回目以降は名古屋の日本カトリック研修センターで行っていたが、2000 年の研修センター廃止にともない、イエズス会日本殉教者修道院と南山研修センター、そしてその他の会場（長崎、札幌、那須など）と 3 年ごとのローテーションを組んで行っている。2017 年の第 28 回は広島で予定されている。

最初は私的な呼びかけから始まったが、第 3 回目からは日本カトリック研修センター主催となり「宗教倫理教育担当者ネットワーク」は協力者となった。研修センターは私たちのワークショップ

をするのに最適な態勢と施設をもっていた。しかし、2000年に研修センターが廃止されるに及び強力な後ろ盾を失ってしまった。学校からの公費出張を得られるかどうかはこのWSの死活問題であることを分かっていたからである。

そこでカトリック中央協議会学校教育委員会、日本カトリック教育学会、日本カテキスタ会(NCK)、に後援をお願いした。幸いこれらの後援は快く得られ、2000年の第11回の札幌WSからはこれらの3団体からの後援ということで行われた。

ところが2010年の第21回から学校教育委員会からは後援が得られなくなった。後援については毎年依頼状を出していて、依頼状と一緒に送った報告書を見た担当の司教が「これは私的な研修会だから後援することはできない」と後援をこたわられた。

そんなときに助け船が与えられた。カトリック学校連合会である。学校教育委員会からの後援が得られなくなってしまったと当時学校連合会の理事長の河合神父に相談したら「では学校連合会から『賛助』として若干の経済的援助をする」という嬉しい応えが返ってきた。

そのおかげで、私たちはこのWSへの参加呼びかけをプロテスタントの学校にも送ることにした。プロテスタントの中高もカト

リック校と同じくらい100あまりの学校がある。「これはカトリック学校の「宗教」「倫理」教育担当者のためのワークショップなので、WSの期間中毎日ミサがあり、朝夕の祈りもカトリック式に行いますが、それをご承知の上申し込まれるなら大歓迎です」と呼びかけることにしている。この呼びかけの結果、プロテスタントの学校から毎年1～2名の参加者が来るようになった。プロテスタントの「聖書科」教員担当者の研修コースはないことはないのだが、このようなWS形式の研修はプロテスタントにはなくてとても役に立つと好評であった。

2013年の第24回からは対象を小学校の先生にも広げることにした。それまでもときどき個人的な繋がりから小学

表 宗教倫理教育担当者ワークショップ履歴

回	テーマ	期間	参加者数
第1回	なし	1990.8.15～18	16
第2回	なし	1991.8.8～11	18
第3回	聖書をどう教えるか	1992.7.28～31	20
第4回	愛をどう教えるか	1993.8.10～13	25
第5回	福音的価値観をどうはぐくむか	1994.8.8～11	25
第6回	宗教で学ぶ現代社会の諸問題	1995.8.16～19	23
第7回	人間の尊厳を考える授業の創造	1996.7.28～31	20
第8回	イエス・キリストとの出会いを作り出す授業	1997.8.13～16	18
第9回	関わりを育てる授業	1998.8.10～13	12
第10回	生徒の心の叫びに応える授業	1999.8.5～8	21
第11回	いのちの福音を伝える	2000.8.7～10	21
第12回	いのちの福音を伝える 20	2001.8.7～10	20
第13回	創造主なるおん父をどう伝えるか	2002.8.14～17	20
第14回	生きる力をはぐくむ授業	2003.8.1～4	19
第15回	いのち・平和・愛	2004.8.6～9	18
第16回	いやし・ゆるし・平和	2005.8.2～5	14
第17回	祈り・祈ること	2006.8.4～7	19
第18回	主の祈りを授業でどう教えるか	2007.8.10～13	17
第19回	神は男と女に創造された	2008.7.30～8.2	14
第20回	現代の心の闇に光りをもたらす授業	2009.7.31～8.3	25
第21回	いのち―自殺防止の視点から	2010.8.9～12	22
第22回	こころに響く宗教の授業	2011.8.2～5	30
第23回	こころに響く宗教の授業 その2	2012.8.6～9	18
第24回	ゆるしといやし	2013.8.6～9	16
第25回	福音を生きる	2014.8.4～7	20
第26回	宗教と道徳の授業	2015.8.8～11	28
第27回	アクティブ・ラーニングで宗教の授業	2016.8.9～12	23
第28回	アクティブ・ラーニングで宗教の授業 その2	2017.8.1～4	

校の宗教担当教員の参加があったけれど、いちおう全国の学校に呼びかけたのはこの時からであった。この WS に小学校の教員の参加が多くなったら、小学校部会は独立し、中高部会とを併設して模擬授業やセッションは別々に行うことができればいいなと思うている。

これまでの参加者の態様である。この WS への累積参加者数は 497 名、実質参加者数はこれまで 188 名、カトリックの小中高からの参加は 73 校、プロテスタント校からは 11 校 12 名の参加があった。つまりリピーターが多いというものこの WS の特徴であろう。この WS の参加者の構成は 3 分の 1 が新規参加者、3 分の 1 がリピーター、3 分の 1 が常連のメンバーというのがもっともいいようである。常連のメンバー抜きにはこの WS は成り行かないであろう。模擬授業を行う担当者の比率もこの構成がもっとも望ましいようである。ほとんどの常連のメンバーの参加費は自己負担である。

もう一つのできたらいいなという夢がある。それは生徒の参加である。ワークショップに中学生高校生たちを連れてきて、そこで中学生高校生の交流会を同時進行し、模擬授業の時に生徒役をやらせてもらうともくろむのだが、これはなかなか実現しない。

最近、参加している教員の生徒だったひとが「宗教」を教える教員となってこのワークショップにやってきたという例も見られるようになった。

3. 各セッションの構成と流れ

WS の構成とながれは最初のころからほとんど変わっていない。以下のようになっている。

オープニングのミサ

入祭の歌は「主は水辺に立った」の 1 番と 2 番。閉祭の歌が 3 番と 4 番と何となく決まっている。これから始まる 1 年ぶりの WS に期待に胸をふくらませかつときめかせ歌う。

セッションⅠ 出会いと再会 1 日目午後

1. オリエンテーション
2. 係の分担
3. この WORKSHOP への期待と自己紹介 EXERCISE

このセッションでは自己紹介と役割分担が行われる。自己紹介では単なる自己紹介にとどまらず「自分の学校の誇りに思うこととはすかしい思うところ」みたいな簡単な問いかけが出されてそれにそって自己紹介が行われる。

役割分担にはこの WS の役割、つまり、模擬授業の担当、各セッションの司会、タイムキーパー（発言が長すぎるときに忠告したり、休憩の宣告をしたり、模擬授業のチャイム係）ミサの典礼係、プリント印刷物の管理、記録係（模造紙、PC 入力）、Facebook への中継係、朝の祈り、夕の祈りの係、食事の祈りを決める係、会場係、レクリエーション係（セッションの前に歌う歌を決めたり、ちょっとしたエクササイズをしたり）などなど、それらをみんなで分担し合う。

セッションⅡ 体験の分かち合い（一日目夜）

1. 宗教や倫理を教えての「やりがい」と面白さを感じたこと。
2. 苦勞していること、困難を感じていること。うまくいかなかったこと。
3. 生徒との関わりの中で、生徒のどのような NEEDS に応えるのか。

ここでは3つの問いかけに応えるかたちでこの1年間の教員生活を振り返る。この振り返りもとても大切な部分である。これは4人の小グループで分かち合ったあとにそこで分かち合われたことでぜひほかの人にも聞いてほしいことが全体の集まりで報告される。

夕の祈り

担当者が担当者のスタイルで行う。時にはテーゼの集いふうには時にはキャンドルサービスふうには。

朝の祈り

これは中庭で行ったりすることが多い。7時半から30分くらい、けっこう長く感じられる。

セッションⅢ カリキュラムと授業（2日目午前）

1. どの学年で何を教えているか。それぞれの学校のカリキュラムの紹介。
2. 宗教・倫理の授業を展開する上で心がけていること
3. とても面白かった授業の紹介、作業や EXERCISE などを取り入れた授業のあり方

各学校のシラバスが持ち込まれ、どの学年で何を教えているのかということが分かち合われる。これは10人くらいの中グループで分かち合われ、その記録は模造紙にはり、全体でこれを見て関心を持ったところにシールを貼り、シールの多く貼られたところについてもう一度全体の集まりで報告する。

セッションⅣ テーマの実践報告（2日目の午後）

1. そのWSのテーマを実際にどのように取り組んでいるかを分かち合う。各自用意してきた模擬授業の内容を出し合う。
2. 模擬授業を参加者個人の持ちネタとするのではなく、グループで検討しながらみなで作りあげていくということもある。

模擬授業担当者の決め方であるが、最近はそれぞれが準備した持ちネタ模擬授業を第1セッションで決めることが多いが、たとえばこのセッションで小テーマ毎に分かれたグループでアイディアや教材を出しあい、グループで模擬授業の進め方や担当者を決めることもあった。模擬授業担当者がどうしても決まらない場合にはジャンケンやあみだくじで決めたこともある。

最初のころは新任や初参加者に何とか模擬授業をするように常連メンバーが働きかけていた。そのすすめにのって模擬授業をしてしまった若いシスターが終わって帰るときに、「また来てくださいね」といったら「もうこりごりです」といって帰られたのが印象に残っている。しかし、そのシスターは15年くらいたってまた参加された。

セッションⅤ 2人の助言者からの提言（2日目の夜）

1. この時間は2人の助言者の話をきく。多くの場合そのWSのテーマに関係する話を用意してもらった。

第4回目くらいから助言者は固定するようにした。一人は南山大学教授の聖書学者江川憲神父、他の一人は桑原直己筑波大学教授で専攻は倫理学、トマス・アキナスの研究者である。二人の助言者をお願いするときに「このWSと一緒に成長してくれませんか」とお願いした記憶がある。現在は神言会の西脇良神父、南山大学で宗教心理学の教鞭をとる傍ら、南山小学校の校長を務められている。

特に桑原教授は最初現場にあまり役に立ちそうもない「理論」を披露されていたが、だんだんとピントが合ってきて、私たちもそこが知りたかったというような話をされるようになった。またこのWSとの関わりで彼の研究対象も大きく影響を受けたようである。「私たちとともに成長された」ことに敬意を表したい。

セッションⅥ、Ⅶ 模擬授業（3日目の午前・午後）

1. 学校の授業のように模擬授業を実施する。（6時間分）
2. 模擬授業の「見直しシート」に記入する。

最初に模擬授業の対象者の学年、性別、お行儀の程度が紹介され、授業の始め方や挨拶の仕方についてのインフォメーションがある。授業のはじめと終わり方はその担当者の学校のスタイルで行う。模擬授業では完全に授業者は授業者に生徒役は生徒になりきらないといけない。特に問題は「お行儀の程度」、C段階やD段階にするともうたいへんである。しかし、そういう授業が実はもっともおもしろいことは確かである。

お行儀の程度を大胆にもDにしたところ、生徒たちから質問攻めにあい、ついに自分の予定していた授業をほとんど展開できなかった例もある。

セッションⅧ 模擬授業の評価（3日目の午後と夜）

1. いままで見てきた「模擬授業」全体を振り返って
2. このテーマを深めるために

模擬授業が終わったら、授業者へのメッセージを書く。授業に参加しての感想や自分だったらこうするというアドバイスなど個人宛のメッセージを書く。10分の休み時間中に書くのでけっこう忙しい。

そして全部の模擬授業が終わったあと、一つ一つの模擬授業についての評価をしていく。ひとり20分、先ず授業者が感想を読んだの感想や自己評価について話したあと、「私だったらこういう教材を使ってこうする」「あそこはこうしたよりもむしろこうするほうがよかったのかもしれない」などの評価意見が出てくる。ちょっと厳しい意見も出てくるが、授業者を励まし支えたいという雰囲気になっているので、厳しい評価がでても落ち込んで自信を失ったり、人間関係が崩れるということはない。

セッションⅨ まとめと今後の方向を探る（3 日目の午前）

1. この WS でいったい何を得たのかを出し合う
2. 次の 1 年間に自分の学校でぜひとも試みたいこと
3. この WS ならびに NETWORK ができたらいいと思うこと

最後のセッションである。このセッションではまとめと今後の方向性（特に来年のテーマ）を考える。

まず最初に 3 種類の色上質紙のカードが配られる。そこに一枚に 1 ポイントずつ、次のような内容のことを書く個人作業がある。

青色のカードには「このワークショップで得たもの」

黄色のカードは、「実際の授業でやってみたいこと、試みたいこと」

緑のカードは、「この 1 年に何をするのか、具体的には次の WS のテーマについて」

カードに記入が終わったら、4 人のグループを作り、そこでそれぞれが書いたことをひとつずつ読み上げる。途中話の中で追加されたことはその場で新しいカードに書いて追加していく。

青色が終わったら、黄色のカード、そして緑のカードを読み上げて新しく浮かんだアイデアを追加していく作業をする。

セッションが始まる前に歌った歌やエクササイズ、紹介された本についてあげることも多いが、模擬授業から学んだことを実際に授業でやってみようとすることも多い。これが模擬授業のもっとも大きな成果なのである。この模擬授業でどんなことをしてどんなことが分かち合われたのかを記録することにもなる。

次の WS はどういうテーマですかを決めるのも大事なことである。それにむかって授業案や教材を集めなくてはならないからである。

派遣のミサ

派遣のミサでは、奉納の時にそれぞれが書いたカードを奉納する。

平和の挨拶では、最近はだれかれとなくハグし合うことが多い。中には感激のあまり涙を流す人もよく見られる。この 3 泊 4 日のワークショップを経ると、参加者がとてもいとおしく感じられるようになり、だれかれとなくハグしたくなるのである。こんな集まりはそうそうあるものではない。

その他

●各セッションの前に運営チーム、助言者、司会役の人が集まって、セッションの進め方について確認をする。ほとんど同じやり方を踏襲しているので、確認する程度で始めて司会する人に説明する程度で済む。

●一日のスケジュールは、朝 7 時半からの朝の祈りで始まり、9 時すぎの「夕の祈り」で終わる。けっこうハードスケジュールであるが、そのあとしばしば番外セッションが行われたり、ハッピーアワーがある。時間がたつほどに櫛の歯が抜けていくように参加者が自分の部屋にもどって少なくなっていくのだが、いつも最後まで残る人は決まっていた。初日の夜は 1 時頃、2 日目は 3 時ころ、3 日目は夜がしらじらとあけるまで話し込んでいたこともよくあった。3 日間で合計睡眠時間が 10

時間であったとしても、翌日の朝の祈りにはしゃきっとでてくるし、セッションの間に眠くなることもほとんどない。これはまぎれもなく聖霊の働きの結果であると信じている。

●WSの間は実によく歌を歌う。セッションの始まり、休憩時間が終わったとき、などセッション開始あるいは再開の合図である。ギターが必須なのである。毎回専用の歌集を印刷する。その度に新しい歌が追加され、その新しい歌を練習するのもけっこう楽しい。歌がないときは簡単なエクササイズがある。「手拍子パーカッション」「神さまですか?」「人間知恵の輪」「聖書ジェスチャー」などの楽しいレクも生徒と一緒にやってみたくなるような内容のものが多い。

●参加者は授業プリントやおススメ教材、学校紹介パンフレットなどを持ってくるように要請されている。そういうものは家から持ってくるというよりも今は宅配に依頼して着時間指定で配達されるようになった。さっそく自分のブースを作ってそれらを展示する。ここから教えられて教材となって活用したものも多い。

4. このワークショップのパワーの源泉

筆者は教員研修会が好きで各種の研修会にはよく参加した。情報教育の初期のころの研修会ももしかだったが、このWSほどパワフルな研修会はなかったと思う。そのパワーはどこから生まれてくるのか、について考えてみよう。

先ず第1に、参加者のニーズがはっきりしていることがあげられるだろう。とにかく「宗教」「倫理」の授業をよくしたい、生徒のニーズに応えられる授業としたいという欲求がはっきりしている。だからそれに応えられればいいわけである。

第2に、それに応えるには、外部からリソースパーソンを招いてそこから学ぶことも可能であるが、私たちはほとんどそれをしていない。それよりもよりよい授業をつくりだそうと日々試行錯誤をしているその結果を持ち寄りそこから学ぶことが実に多い。明日からすぐに使えて役に立つものばかりである。

第3に、そこで分かち合われる授業実践の内容のうち自分の学校でもそれをやってみようという気にさせるものが少なくない、それを自分なりに作りかえたりしてできた結果をもちよろうとすると、自然にいろいろなバージョンが出現する。これがWSに蓄積されていって共有財産となる。

第4に、日常的な交流を支えてきたものがある。この集まりは当初は1年に一度の3泊4日のワークショップをとおしてつながってきた。しかし1998年にメーリングリスト（以下「ML」という）が導入されると日常的な交流が可能となった。ここをとおして「今度の授業で扱うテーマについていい教材はないか?」とか「テレビで放映された番組を録画していた人はいないか?」とか「それぞれの学校では朝の祈りをどう進めているか?」とか誰かがMLに投じると誰かがすぐに応えてくれる。これが実に嬉しい。

誰かがこのWSの分かち合いについて、一緒にする食事のあり方になぞらえて解釈してくれた人がいた。みんなで一緒に食事するときにいろいろな食事の仕方があるという。

誰かの家に行ってその家の料理の上手な人が作った料理をみなで楽しむ。

どこかのおいしいレストランに行ってそこで出された料理をみなで楽しむ。

スーパーやデパ地下のお総菜を買って持ち寄ったりお弁当を買ってきてそれを分かち合って楽しむ。

各メンバーが家で作ったものを持ち寄って料理を楽しむ。

メンバーが材料を持ち寄り、一緒に料理するところから始まる。この良さは料理のつくrikたを一緒に学べるところにある。

このワークショップの分かち合いは明らかに最後の例であろう。つまりみなで材料を持ち寄り、それを一緒に調理し、できたものをみなで分かち合う形である。

第5として考えられることは、ここがなんでも分かち合える場所であることだろう。自分の学校での失敗の体験も恥ずかしくもなく分かち合えるし、自分の勤務校に対する不平不満も聞いてくれる。直接的に利害関係があるという関係ではないので自由に話せるというのもあるだろう。特に適切な助言が与えられるわけではないけれど、何よりも自分のことのように聞いてくれて、「自分にも似たような失敗があった」と報告してくれたりするのは大きな支えとなる。

5. 終わりに

中高での宗教教育の現場から離れて9年、さらに来年から私は大学での「宗教科教育法」の担当からも外れる。つまり教育現場を持たなくなる。そんな自分が今後このワークショップとどのように関わっていくべきか考えている。現場の教員たちの忙しさを知っているから、私はせめて裏方としてワークショップの開催のための事務的なことを一手に引き受けてやってきた。

これをこれからもずっと動けなくなるまで続けるべきかどうか、それとも潔く手放して後進に譲り渡していくべきなのか。

実は、私は本稿で「カトリック学校教員養成塾」の「養成」についても振り返ってみたかったのだが、残念ながら今はここで打ち切るしかない。カトリック学校教員養成塾についてはぜひ別な機会に取り上げてみたいと思っている。